

ヨーロッパの移民からフランスの移民まで —多元的社会と多元的アイデンティティを めざして

ジャン=クロード・ベアコ

JEAN-CLAUDE BEACCO



パリ第3大学名誉教授（言語文化教育学）、欧州評議会言語政策部門プログラム顧問、中等教育1級免許保持者（文法）、博士（言語学・フランス語教育）。アルゼンチンにおけるフランス語教師の養成を皮切りに、対外フランス語・文明教育研究所研究員、在ローマ・フランス大使館文化語部言語アタッシュェ、サンクルー高等師範学校フランス語普及研究センター准教授、メヌ大学教授を経て、パリ第3大学教授を歴任した。

移住とは、ヨーロッパにおいて非常に古くからある現象である。しかしこれは、グローバル化の中で人間の移動が活性化することにつれて新たな次元に入り、社会での議論の対象となり、重要な政策課題にもなってきている。

一・移住に関する長い歴史

ヨーロッパは、古代から長期間のあいだ他の土地から人々が到来しており、そこにはローマ帝国に移動してきたゲルマン人やゴート人なども含まれる。このような人口移動はしばしば「民族大移動」という名称

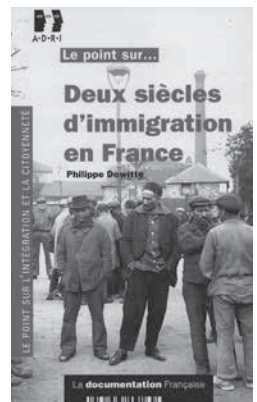


写真1 「フランスにおける200年の移民の歴史」

で語られるが、実際のところは移住である。そもそも、ローマ人自身もかつてはイタリア半島から西ヨーロッパ一帯に移住してきたのである。

近代になると、多くのヨーロッパ人が海を渡り、アメリカ大陸へと移住をした。イギリス人やフランス人、アイルランド人、ドイツ人はアメリカ合衆国へ向かい、スペイン人、イタリア人はラテン・アメリカへ向かった。また国内の移住もしばしば行われ、フランス中央部の人々は大都市へ向かった。たとえば、リモージュ地方の石工やオーヴェルニュの人々はパリに上り、カフェの経営者となるものが多く、ここでは炭も販売していた。

二〇世紀に入ると、産業の活性化とともに多くの労働者が必要となり、大量の人口が移住した。イタリア人やポーランド人はフランス北部や東部、あるいはベルギーの鉄鉱石の鉱山や炭坑に來た。シシリアやカラブリアなど南イタリアのイタリア人は、ピエモンテやロンバルディアなどの北イタリアへ向かった。そこには、フィアットの自動車工場や製鉄工場があったためである。ギリシア人やアルメニア人、ルーマニア人もまた、このような経済的理由から世界各地に移住していった。世界各地ではイギリ

スやフランスに対する植民地解放運動が起こったにもかかわらず、旧宗主国へ向けた移住の動きはとどまることがなかった。たとえば、アルジェリアやチュニジアからフランスへと移住が陸続と行われたのである。二〇世紀末になると、それまで移民の送り出し国だったイタリアやスペイン、ギリシアなどの国が移民の受け入れ国となった。

一・一 フランスにおける移民の波

フランスにおける産業革命は、第二帝政下の1851年から1870年にかけて本格化した。一八世紀以来、フランスでは人口の伸びが緩やかであったため、一九世紀に労働力が改めて必要になると、近隣諸国から労働者の移住を募った。地方によって異なるが、フランスにおける初期の移民はベルギー人やピエモンテ人（その後イタリアという国家となる地域から来た人々）であり、またスイス人だった。スペイン人やドイツ人はフランスの大都市へ向かい、



写真2 パリにある移民史博物館は、1930年に行われた植民地博覧会のパビリオンを改装したもので、庭にはアフリカでのフランスの植民地経営を顕彰する記念碑がある

フランスの経済発展や人口の拡充に貢献する。一八五一年から人口登録に国籍や出生地が記載されるようになる。第二帝政の終わりになるとイタリア人は一〇万人以上を数え、一九世紀末には三三万人を数えたが、これらの数字は季節労働者の数値を含まない。一九一四年頃にマルセイユの人口は五五万人を数え、そのうち一〇万人以上が外国人であり、それは主にイタリア人だった。

このような移民の波に平行して、フランス社会では庇護権政策が外国人の擁護を進めたために、ドレフュス事件のような国粋主義運動や、愛国者連盟などの反ユダヤ主義で排外主義的な極右団体が発展していった。

移民の第二の波は、第一次世界大戦の終わりから第二次世界大戦の前夜にかけて発生した。二〇世紀初頭にフランスの人口は依然として伸び悩んでいたことから、フランスは「外国人労働力」をベルギーやスイス、イタリア、またアルジェリアのカビリア地方に求めた。そして植民地からの労働力は危険な作業に活用された。フランスには一九三一年に二八九万人の外国人が居住し、これは総人口の五・九%に相当した。この中でも、一九二一年から一九三九年にかけて一〇〇万人近い人々が帰化したのが、彼らは主にイタリア人やポーランド人、スペイン人、ベルギー人である。

移民の第三の波は第二次世界大戦の頃より始まり、これは家族呼び寄せによる移住を特徴としている。一九四五年になると、国土の復興が優先事項とされ、移民は両義

的にとらえられるようになった。移民は継続的に滞在し、家族を伴い、労働に従事している。その一方で行政は一九七四年七月以降、外国人単純労働者の入国を停止し、一九七八年から八〇年にかけて北アフリカの外国人労働者を強制的にアルジェリアに帰国させようとする。しかし、これは成功を収めなかった。そして「外国人労働力」や「外国人労働者」といった用語は、次第に「移民労働者」と言った用語に置き換えられていった。

一九七〇年代の経済危機の一部は確かに一九七三年の石油ショックによって引き起こされたことから、国は移民の流入を管理するようになる。一九七七年はベビーブームの終わりを告げ、フランス共和国大統領となったヴァレリー・ジスカール・デスタン（一九二六、在任一九七四〜八二）は新規移民の入国を停止する。ただし家族呼び寄せはこれに含まれるものではなく、これ以降、正規移民の大半は家族呼び寄せにより入国することとなった。また大統領は帰国者への一時金を提案した。一九八〇年になると、ボネ法が導入され、フランス国内への入国条件が強化され、非正規移民の送還が容易になったため、ハンストが発生し、この政策は部分的に停止された。移民の流入は、高齢化する人口に多少の歯止めをかけることに役立つものの、移民だけでこの課題を完全に解決することはできない。一九八一年の大統領選挙を受けて、左派のミッテラン政権（任期一九八二〜九五）のもとで政府は、非正規状態にある外国人およそ一三万人を大量に正規化し、ボネ法

の廃止により移民の滞在条件を緩和し、本国への帰還に伴う一時金を廃止した。「移民労働者」という用語は次第に「移民」という用語に置き換えられ、フランス人は、移民が一時的な住民ではないと理解するようになった。

一九九五年に右派のシラク政権へと政権が交代したことを受けて、一九九六年の法律は滞在許可証の取得に制限を下し、非正規状態にある外国人の送還はいつそう容易になった。極右政党の国民戦線は移民に反対し、フランス社会が経済不況にあるため、外国人排斥の言説はますます反響を招いたが、その一方で一九九〇年にSOSレイシズムが設立された。この団体は、なかでも刑務所に服役中の外国人の本国への送還に反対して戦っている。この頃より、移民はフランスだけでなく、オランダやイタリアなどでも重要な政策論争のテーマとなり、ナショナリズムへの回帰をかき立てている。

一・二 現在の移民について

国連の定義によれば、二〇一〇年にフランスは七二〇万人の移民を受け入れており、これは総人口の一・一%に相当する。フランスは世界第六位の移民受け入れ国であり、アメリカ合衆国（四二八〇万人）、ロシア（一二三〇万人）、ドイツ（九一〇万人）、サウジアラビア（七三〇万人）、カナダ（七二〇万人）に次いでいるが、イギリス（六五〇万人）やスペイン（六四〇万人）には勝っている。フランスは、移民出身（第一世代と第二世代）の人口比が最大のEU加盟国の一つである。フランスでは



写真3 パリにはベトナムからの移民も多く暮らし、ベトナム風サンドイッチを売る店もある

二五歳から五四歳の人口の一三・一％が、また子どもの一三・五％が、全体としては二六・六％の人口が移民出身であり、イギリス（二四・四％）、オランダ（二三・五％）、ベルギー（二二・九％）、ドイツ（二二・九％）、スペイン（二〇・二％）に勝っている。

移民を最も狭い意味で規定している国立経済統計研究所によれば、移民とは「外国で外国人として生まれた人」である。これによれば、移民および移民の直系は二〇〇八年にフランス本土に一一八〇万人居住し、これは総人口の一九％に相当する。この中でも、五五〇万人はヨーロッパ系であり、四〇〇万人はマグレブ系である。

二〇〇四年には一六万九〇〇〇人がフランス国籍を取得し、その後の二〇〇五年にこの数値は一五万五〇〇〇人に減少したが、それでも一九九九年以降を見ると一〇〇万人以上がフランス人に帰化したのだ。つま



写真4 パリにはインドからの移民も多い

り一九九九年から二〇〇七年までの間に一一四万人の外国人がフランス人に帰化したことになる。その中では、四〇％以上の国籍取得者が未成年であり、その数は明らかに一番多い。未成年やその両親のおよそ半数は子どもが一三歳になると、はやばやと国籍申請を行っている。彼らは国籍の申請が、自らの統合を表明するためであると考えている。

二．移民という課題

移民を制限し、さらには入国を停止する必要の有無をめぐる激しい論争が繰り広げられている。このような主張をする人々は、移民が雇用を圧迫し、フランス人の生業を占拠しているとか、フランス人のアイデンティティに影響を与えているといった偽りの脅威論に基づく議論を喧伝している。極右政党である国民戦線の支持者の大半は移



写真5 移民とフランス人の連帯を訴えるポスター（移民史博物館にて）

民反対論者であり、フランスでのアラビア語使用や、目に見えるものとなりつつあるイスラームの存在に過敏になっている。最近ではいくつかのモスクが建設され、イスラームは可視的存在になりつつある。そして彼らは、フランス国内や世界各地でのイスラーム過激派によるテロ活動に対して激しい怒りを向けている。

二．一 移民と経済

一九七〇年代まで、移民がフランスに入国する主要な理由は経済的事由であり、これはフランスが労働力を必要としていたことや、移民の生活の必要にも結びついていた。当時、移民は恵まない国から到来していたからである。一九七五年以降になると、家族呼び寄せのための移住が中心を占めるようになる。二〇〇〇年代の初頭までは、家族呼び寄せが重視されており、この政策によってフランスに正規滞在している外国人はフランスに家族を呼び寄せることができたのである。

二〇一〇年に家族呼び寄せのための移住は、フランスへの入国者数一九・四万人の四五％を占めており、そのうちの二七％は

フランス人家族による外国人の呼び寄せとなっており、八%が移民による家族呼び寄せにあたる。これに対して、経済的事由からの移民は入国者の九%にすぎない。二〇〇〇年代に増加している移住の重要な事由は留学であり、これは二〇一〇年の入国者の三二%にのぼる。

多くのエコノミストは、これまでに移民の経済的、財政的な影響を検討し、以下の点を解明した。

- 1) 三〇歳から四九歳の外国人と同年齢のフランス人の労働力人口率は、それぞれ九〇%と九五%とほぼ同じである。
- 2) 移民は労働市場を補充し、経済のあらゆる分野で就労しているが、労働市場はさまざまな資格を必要としている。したがって、資格者のみの雇用を目的とする移民政策は、経済的、社会的に矛盾する。
- 3) 移民だけが、人口の高齢化に対抗する要因ではないにせよ、移民は出生率の減少を部分的に補う。
- 4) フランスが「移民ゼロ」政策を採った場合、二〇五〇年の時点で社会保障費の財源には国内総生産の三%ではなく、五%が必要となる。
- 5) 労働市場に対する移民の影響力を見ると、移民労働者はオールドカマーの移民の労働者の一部と競合するにすぎない。

経済開発協力機構(OECD)によれば、移民は長期的に見れば、経済成長にとって決定的な役割をとる。そこで、OECDは、

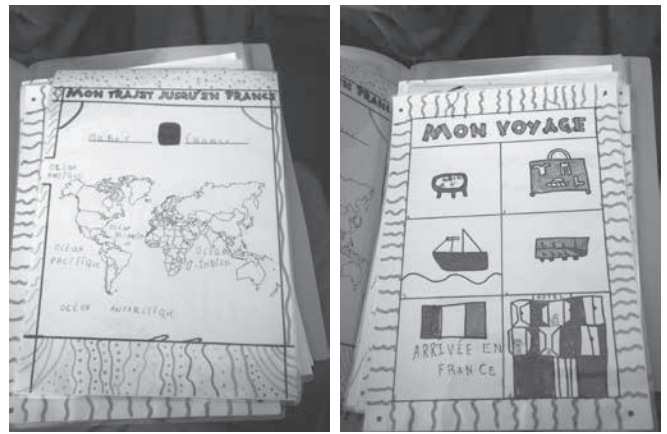


写真6 ニューカマーの子どもたちの出身地は世界各地に及ぶ

各国がたとえ不況の時であれ、移民に対して国境を閉ざすことのないよう呼びかけている。OECDのエコノミストは二〇一三年六月に刊行された報告書の中で、加盟国は若年移民のおかげで平均すると数十億ユーロの補足的な利益を獲得していると評価している。しかし報告書はその一方で、オールドカマーの移民は多くの年金を必要としていることから、フランスは毎年一〇〇億ユーロの公費を支出しているとも述べている。

これと異なる分析によれば、移民によって相当数の企業はヨーロッパに安価な労働力を呼び寄せることができるため、長期的にみればヨーロッパの労働者の給与の削減に影響を与える。「移民人口が一%上昇す

ると、給与が一・二%減少する」といわれている。しかし、アメリカ合衆国に関する一九九四年の研究によれば、「移民は給与にはほとんどの影響を与えない。」また、多くのエコノミストによれば、移民は給与にプラスの効果を与えるとさえ言われている。

二・二 移民と文化

世界の大部分では、植民地化や「西洋化」のため、多くの社会や文化が消失してしまった。現代のグローバル化は画一化を招いているが、これまでの人間社会の歴史に見られたように、それでも現代社会はつねに新たな文化の混淆を生み続けている。多くのフランス人は多様なアイデンティティを手探りで作り上げている。彼らは特に意識することなく、クスクスやピザ、中華料理を次々に食ったり、またフラメンコやサンバ、太極拳のレッスンを次々に受けたり、さらにはマラケシュやイスタンブールで週末を過ごし、多様なアイデンティティを作り上げている。このようにして、大都会の中では新たな人間文化が少しずつ生まれきており、「混淆」が生み出され、これまでの伝統文化や国民の歴史の枠組みが揺れ動いているのだ。

このように現代世界はダイレクトな混淆を体験している。これは多様な移民や、ますます増えゆく国際結婚によるものだ。国際結婚のカップルから生まれた子どもは複数の言語文化の中で成長する。その結果、生まれる複合的なアイデンティティは、複数の帰属意識により作られた形態の一つで

あり、これは社会的行為者一人一人のダイナミックな資質を生み出してゆく。

移民は、芸術の充実にも関わってきた。芸術はホスト国と出身国の間で交差し、混じり合う中で生まれてきた。たとえば、ジョゼフィンヌ・ベーカー（一九〇六～七五）は、アメリカのミズリー州セントルイスでフリーダ・ジョゼフィンヌ・マクドナルドとして生まれ、アフリカ系とアメリカ・インディアン系の混血であるが、

一九三一年に「私は祖国とパリを愛している」という歌を歌っている。また、エディット・ピアフ（一九一五～六三）は、「イタリアのリヴォルノに生まれた歌手のアンネッタ・マイヤールの娘であるが、マイヤール自身はモロッコのベルベル民族出身なのだ。一九五〇年から六〇年代にかけて活躍した歌手の多くは移民の出身で、その後フランスのアイデンティティの象徴となったのである。ジョルジュ・ブラッサンス（一九二一～八一、彼の母はイタリアのバジリカート出身）や、ジャック・ブレレ（一九二九～七八、ベルギー出身）、レオ・フェレ（一九一六～九三、母はイタリア出身）、イヴ・モンタン（一九二一～九一、イタリア出身）、バルバラ（一九三〇～九七、父はユダヤ系アルザス人、祖母はロシア人）などがそれにあたる。次の世代には、セルジュ・ゲンズブール（一九二八～九一、ユダヤ系ロシア移民の息子）やクロード・ヌガロ（一九二九～二〇〇四、母はイタリア出身）、ダリダ（一九三三～八七、イタリア出身）、アラン・バシユウング（一九四七～二〇〇九、父はアルジェ

リア人）などがある。現在の世代には、ゼブダ（フランスのロックグループで、メンバーはマグレブ系移民）、ベナパール（一九六九～、イタリア系移民）、カリ（一九六八～、イタリア系移民）などがある。これを見ると、フランスのシャンソンは「メテック」（「異国の入」の意味で、ギリシア出身の歌手ジョルジュ・ムスタキ（一九三四～二〇一三）の歌のタイトル）による芸術と言えよう。

また、フランスでは外国出身の芸術家の貢献がよく知られている。モジリアニ（二八八四～一九二〇、イタリア出身）やシャガール（一八八七～一九八五、ロシア出身）、ステイン（一八九三～一九四三、ロシア出身）、ピカソ（一八八一～一九七三、スペイン出身）、フジタ（二八八六～一九六八、日本出身）、ダリ（一九〇四～八九、スペイン出身）や、またヴァザリ（一九〇六～九七、ハンガリー出身）、ザオ・ウイキー（一九二〇～二〇一三、中国出身）などはみな外国出身のフランスの芸術家である。移民は「フランス的特性」を破壊するどころか、それを活かし、豊かにしている。

二・三 移民と言語

移民は自分たちと共に言語を持ち込み、これは出身言語と呼ばれる。しかし、この言語は失われたり、家族の中では三世代もたてば継承されなくなることもある。これは豊かさの喪失でもある。

ところで成人移民はホスト社会の言語を学ぶよう期待されている。「言語統合」と



写真7 パリの小学校にはニューカマーの子も多い。フランス語の話せない子どもたちに向けた「受け入れクラス」の一場面

は、移民が他の話者と区別されなくなり、またごくわずかな点しか気づかれないようになること（たとえば、わずかな訛り）であると理解されることが多い。さらには、自分の知っている言語を公的な空間で使わなかったり、それを忘れてしまうことだと理解されている。このような定義は、ある種のネイティブ話者の期待、すなわち言語的均質化に対応するものだ。さらに、このような解釈によれば、成人移民は支配言語や公用語の高度な運用能力を証明しなければならぬ。この言語能力はホスト国に対する移民の忠誠心を表すと考えられている。というのも、言語習得は市民権と同一視されるからである。つまり、「フランス人とは、フランス語を（上手に）話す人」なのである。

このような言語統合に関する外的な定義は、ホスト社会の本当のニーズに対応する

ものでもなく、また移民みずからの望むところでもない。いわゆる内的な考え方に従うならば、多数派の言語、支配言語の習得との関連で言語統合を定義することはできない。言語統合は、むしろ移民一人一人の言語レパートリーとの関連から規定されるべきなのだ。移民を話者という観点から見た場合、言語統合は、個人の言語レパートリーを新たなコミュニケーション空間に適応させることを意味する。

言語統合にはいくつかのパターンがある。個人の言語レパートリーを新しい言語環境に適応させるには多くのパターンがある。これは移民の持つ計画やニーズによるが、およそ次のように分類することができる。

1) 言語レパートリーの穏やかな統合

個人の言語レパートリーの中で使用できる言語能力は均質ではない。たとえば、移民が多数派の言語能力を十分に保持していなければ、効率的にコミュニケーション場面を管理できないし、またそれを管理するには特別の努力をしなければならない。その場合、移民は第三者に頼ることになり、コミュニケーションの是非は話し相手の好意によるところが大きい。また移民は、このため何らかの活動を避けるかもしれないというのも、移民はそれが自分の言語能力の範囲を超えると感じるためだ。また、話し手はこのような言語レパートリーを効率的ではないと感じるかもしれないし、それはフラストレーションの源となるかもしれない。だが、移民がそれまでに習得した言語を価値づけることによって、またホスト国の多数派の言語に完全に実用的役割を与

えることによって、言い換えるならば、実用性以上の役割を与えないことによって、移民は多数派の言語レパートリーを受け入れることができるかもしれない。その場合、出身言語が重要なアイデンティティ機能を保持するかもしれないのである。

2) 言語レパートリーの機能的統合

移民の持つ言語レパートリー内の言語能力が十分である場合、移民は社会や職場での、個人の社会的コミュニケーションの場面をほぼうまく管理することができる。その場での間違いや、間違いの固定化があるかもしれないが、移民はあまりそれに気にとめない。むしろ、間違いを減らして、言語を普通に、また便利に使うと努め、自分もその言語活動を受け入れようとする。この場合、出身言語はアイデンティティを保持する上で必ずしも突出した地位を持つわけではない。

3) 言語レパートリーにあるすべての言語の統合

移民は、多数派の言語を自分の言語レパートリーに取り入れることを通じて、それを情動面において再構築する。この時、多数派の言語は移民がこれまでに習得した言語のかたわらに置かれる。そこでの言語レパートリーはもはや緊張関係にはない。社会生活を送る上で、さまざまな言語が自然に入れ替わり使われるのである。このような言語レパートリーの中で、出身言語はこれまで唯一のアイデンティティを表すものだったが、これからは他の言語と共にアイデンティティを表すのである。

移民やその家族、子どもたちは生活設計

のために、またアイデンティティを保持するために、前述の言語戦略のいずれが最適であるかを考えなければならない。そして学校や教育組織は、このような言語戦略の結果を明らかにしなければならない。移住はアイデンティティをまぎれもなくダイナミックにするのだから、過去の郷愁に凝り固まる必要はない、多元性や混濁を視野に収めて言語戦略を進めることが重要である、と移民や関係者に認識させることが不可欠だ。

結論

ヨーロッパの一部の世論は外国人排斥を行なっているが、これは社会の高齢化や現在の経済不況に起因するものだ。フランスでも外国人の排斥は、レイシズムや反ユダヤ主義、「反黒人」「反マグレブ人」といった、実に古くからの反撥に基づいている。

これはまた、フランス植民地帝国の喪失に結びついていると共に、アルジェリア戦争にあたりアルジェリア側におよそ三〇万人の犠牲者を出し、アルジェリア生まれの八万人のフランス人が本国へ帰還したことにも結びついている。しかしながら、このように、自己を閉ざして己の殻に閉じこめることは、国の経済的利益や力強い文化に反することである。

「変わらずに生き残るためには、自ら変わらなければならない」私は、イタリア人移民の息子として、この言葉をかみしめた。

(訳：西山教行)